

動物と人の幸せ

一年 我妻 暁

僕の家には二匹の猫がいる。二匹はどちらも保護猫。正直、正確な誕生日も種類もわからない。ペットショップに売られているような、立派な種類の猫でもないのだけれど、僕にとっては世界一大切で、死ぬほど可愛い、二人の小さな弟だ。今回は、一番下の弟猫、シンちゃんについて書くと思う。

シンちゃんとは、僕が三年生の時、家族で道に迷った時に出会った。シンちゃんは、森の中に、兄妹四匹で段ボールに押し込められて捨てられていた。うちには既にゼロ君という大切な猫がいる。その上四匹全ては引き取れない…悩みに悩んだ僕らは、一匹だけ仲間外れのように毛色が違って、一番弱っていた子猫を、引き取ることに決めた。

だがこのシンちゃん、なかなか我が家になじまなかった。何度も脱走し、そのたびにお母さんがスリッパで追いかけた。家に戻っても誰とも目を合わせてくれない。今思うと、シンちゃんは人間が怖くてしやがなかったのだろう。人間に怖いことをされたのかもしれない。捨てられて悲しかったのかもしれない。だからこそ僕ら家族全員で、シンちゃんを精一杯幸せにしようと決めた。その気持ちが伝わったのか、最初は警戒していた先住猫のゼロ君も、とても面倒見の良いお兄ちゃんになってくれた。

そして、あれだけ恐がっていたシンちゃん自身も、今ではすっかり我が家になじみ、一番風通しの良いデッキの隅でのびのびと寝ていたりする。人と猫は言葉が通じないので、なかなか困るコトもある。宿題を広げたら、ノートの上にどっかり座られたり、修学旅行の準備中に、バッグの中に入り込まれ、準備ができないこともあった。それでも寒い日にはそっとお布団の中に入ってきて、くっついて眠ったり、高熱で学校を早退した時は、そっと枕元で添い寝してくれたりすることもある。僕はこの小さな二人からたくさん教わった。

言葉が通じなくても気持ちを伝え続ければ伝わること。

誰よりも、僕ら家族に笑っていてほしいと思っていること。

僕ら家族を心から信じ、大好きでいてくれること。

もしこの二人がいなかったら。と、想像しただけで鼻の奥がつーンとして、泣きそうになる。それくらい僕ら家族にとって二人は大切で、かけがえのない、宝物だ。

「二匹の猫を保護する。」これは、動物愛護という活動からすると、ほんの一部なのかもしれないけれど、人と猫が家族になることで、こんなに幸せな毎日があるのなら、なぜ捨てられるのだろう。

僕が伝えたいことは、一度家族に迎えたのなら「心の底から愛してあげてほしい」ということだ。人と動物の出会いが幸せでありますように。